PRO MUSICA NIPPONIA

日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA
第241回定期演奏会

現(うつつ)も夢(ゆめ)

2024年1月19日(金) 18:00開場 18:30開演

台東区生涯学習センター ミレニアムホール

演出:久本桂子
構成:久保田晶子
舞台監督:中島隆

主催:特定非営利活動法人 日本音楽集団 http://www.promusica.or.jp
助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁 後援: 公益財団法人日本伝統文化振興財団 JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION

一、セレモニアル・スペース

CEREMONIAL SPACE

（2001）**一柳慧**

[笛]あかる潤　[笙]東田はる奈　[篳篥]三浦元則
[尺八]原郷隆　[箏]石井香奈　[二十絃]三宅礼子
[打楽器]多田恵子

私は日本の伝統芸術に診られる様式をもった所作が好きだ。お茶を点じたり、花をいけたりする時の所作、あるいは能や聲明などに見られるさまざまな型をもった動作、これらが質感を伴ったとき、そこに比類のない様式美が立ち顕われる。
「セレモニアル・スペース」は、そのようなイメージを、現代の観点から音楽的表現に結び付けられないだろうか、ということから発想した。もとより、長い年月にわたって培われてきたものとは比ぶべくもないが、私自身の問題として、このことが少しでも音楽を考える上でプラスになれば、という思いもあった。
曲は基本的に合奏曲であるが、それぞれの奏者に、ソリスティックな所作も取り込まれている。また、伝統芸術の特質である音楽における空間性をここでも顕在化する上で、時間の束縛からの解放を意図したセンザ・テンポの個所を随所に設けている。
（2001年11月22日 第165回定期演奏会プログラムより　作曲者）

二、夢十夜

YUME-JUYA

（1973）**廣瀬量平**

[笛]芝有維　[尺八Ⅰ]竹井誠　[尺八Ⅱ]饗庭凱山
[尺八Ⅲ]阪口夕山　[太棹三味線]長井麻江
[細棹三味線]穂積大志　[琵琶]藤高りえ子
[箏Ⅰ]久東寿子　[箏Ⅱ]喜羽美帆　[十七絃]石井香奈
[打楽器Ⅰ]多田恵子　[打楽器Ⅱ]山内利一
[打楽器Ⅲ]冨田慎平　[打楽器Ⅳ]盧慶順
[指揮]稲田康

夏目漱石に夢十夜という作品がある。十の不思議な夢を綴ったものだけれど、ヨーロッパというものの本質を嫌という程知った漱石が、かえって盲目的に近代化する日本の中で孤立していったということの上で、この夢は只単に彼自身の心象風影ではない何かであると思う。今夜の私の作品はこれを音楽化したものではなく、全く私自身の夢十夜のつもりであり、曲が十の部分に分かれているわけでもない。この曲についてたとえでいうならば、肖像画であるよりは壁画の群像を、対話の劇であるよりは、交錯し同時進行する無数のドラマを、そしてそれらを呑み込んで流れる河、様々な歪（ひずみ）や亀裂をも呑み込んで流れる河・・・・・・を、このユニークな団体のために展開したいと思った。一つの音あるいは一つの楽句（フレーズ）は、それぞれ独立したドラマのつもりであり、楽器たちが同じリズムで動くことはほとんどない。
（1973年7月3日 第19回定期演奏会プログラムより　作曲者）

三、流觴曲水譜

RYU-SHO-KYOKU-SUI-FU

（1986）**三善晃**

[尺八]田野村聡
[箏Ⅰ]桜井智永　[箏Ⅱ]三宅礼子　[十七絃]丸岡映美

1986年、邦楽4人の会の委嘱により作曲され、初演された。曲名の「觴（しょう）」は、杯のこと。折れ曲がった水の流れに杯を浮かべ、それが流れついた所にいた人が杯の酒を飲むのだが、それまでに詩を作らねばならない、という晋の時代の遊び。のどかな風景だが、そこには私たちが生きる時と、その中で不図（はからずも）の出遇い（傍点）とが、たおやかに描かれている。それはまた、音楽を奏する人たちの間を流れる螺旋状の自然（じねん）の理をも寫（うつ）しとっているように思われる。
曲は、短い「序」につづいて、「流」「觴」「曲水」の三部が切れ目なしに流れる。「序」は時の生態を想い、「流」は尺八の導入につづいて箏により静から動への流れを叙す。「觴」はその箏と尺八の出遭い。「曲水」は主として尺八による水の変容である。（作曲者）
※1986年3月5日　邦楽4人の会　初演プログラムより引用させていただきました。

四、竹籟協奏

CHIKURAI-KYOHSOH

（1975）**諸井誠**

[尺八]元永拓　[十七絃]久本桂子

1975年、45歳の作である。生田流箏曲の戦後派をリードしていた尖端的存在、沢井忠夫氏とたまたま下阪の途次、新幹線の中で出会い、名古屋までの2時間を熱っぽい現代邦楽論での談論風発。時の経つのを忘れて意気投合した。この千歳一遇の機会が瓢箪だったのか、そこから駒が飛び出したかのように話が思わぬ方向に発展して、11月19日に「沢井忠夫、箏の為の劇場空間」という壮大な規模の企画となって、新橋のヤクルトホールで実現することになった。私はプロデューサー兼作曲家としてこのまことに斬新なプロジェクトに参加し、自作のいくつかを提供して、沢井氏中心の接続曲として新たに仕立て直し、その中に拙作尺八現代本曲「竹籟五章」を、尺八の助奏付き十七絃箏曲として組み込むことを思いついた。沢井氏としては十三絃でひきたかったのだろうが、是非とも低音部を補強したかったので、無理を言って十七絃でアレンジさせてもらった。その後、「竹籟協奏」は沢井一門のレパートリーとなって、今日まで命脈を保ってきたが、中島健蔵現代音楽賞受賞式の席上(岩城宏之氏がまだ存命の頃だったが)、受賞者として出席していた二十五絃箏の発案者で、二十絃箏の普及にも大きな功績のあった野坂恵子さんと親しく語り合う機会を得て、改訂版作成を思いついた。
第1部が序奏部と「芬陀」及び「爽竹」。第2部の前に間奏及び尺八のカデンツァを新たに作曲、挿入して、尺八ソロで開始される「虚籟」から第2部に入り、後半、荒々しいスケルツァンドの「破竹」でサブ・クライマックスを聴かせ、第3部は、フィナーレとして、「明暗」で総括するという形に改めた。今後、二十五絃等と長管尺八のための異本・竹續協奏とか、最初から尺八と十七絃の二重奏で始まる「協奏的二重奏曲・竹籟」とか、合奏協奏曲スタイルの「合奏協奏曲・竹籟」とか、さまざまに形を変えた編曲版が生まれる可能性があるが、その意味で、「竹籟協奏」は"進行中の作品(work in progress)"と言えるかも知れない。　（作曲者）

五、貘印＊宝船

BAKUJIRUSHI＊TAKARABUNE

七（八）邦楽器と打物に依る舟歌（バルカローレ）

Barcarolle for 7(8) Japanese instruments & percussion

委嘱初演（2023）

平野一郎

笙：吉祥天【てんにょ】── 東田はる奈
笛／能管：寿老人／福禄寿【おきな】── 新保有生
尺八：布袋尊【ほてい】── 田野村聡
胡弓†：貘【ばく】── 木場大輔（助演）
三味線：毘沙門天【びしゃもん】── 山崎千鶴子
琵琶：弁財天【べんてん】── 久保田晶子
箏：恵比寿【ゑびす】── 桜井智永
十七絃：大黒天【だいこく】── 久本桂子
打物：船頭【せんどう】── 山内利一

†どうしても配役が困難な場合は隠微化されてよい

この作品は日本音楽集団の委嘱に応え2023年春夏秋に作曲した。様々な邦楽器を単一奏者で組み合わせる合奏の構想を始めるや、遥か東の水平線から貘印の帆を掲げる唐船に乗った七福神がやって来て、私の躰をあれよあれよと席巻した。

七福神とはたいてい弁天に毘沙門、布袋、恵比寿と大黒、それに福禄寿と寿老人の七柱だが、最後の二神が異名同体とされたり、時に吉祥天が加わったりする。我らが内なる異国憧憬（エキゾチシズム）を当然に含んだ無節操な諸神混淆（シンクレティズム）。その信仰は、古より渡来した／土着する各々の神が室町末期に京の町衆文化の中で福神たる性質を共通項に結ばれ、巡礼流行りも手伝って、近世の江戸・上方など都市部から爆発的に人気を博した。明治以後は真面目に苦悩する知識人を尻目に、前近代と近代の溝をヒョイと飛び越え、固有と普遍があい睨む壁をガヤガヤ壊し踏みつけて、大正昭和平成令和と時代を跨ぎ、列島の津々浦々まで伝統然と広がっている。

奇怪な凸凹（でこぼこ）七神が金銀財宝呪具秘玉を満載した一艘に同舟、黒潮の荒浪越えて首尾よく陸（おか）に漂着し機械仕掛（デウス・エクス・マキーナ）けの神よろしく有難き福を人々に齎（もたら）す── 不気味なまでにお目出度く怠惰を極めたこの救済幻想は、世の成り行きに飽き飽きするほど翻弄された日本の庶民が巧まず覚（さと）った「現（うつつ）も夢（ゆめ）よ」とばかりの深い諦めの底で、うばわれても奪われぬ度し難い生命力に根づいている。

私は、その剥き出しの現世利益（げんせりやく）の悍（おぞま）しくも逞（たくま）しい包摂力に肖（あやか）って音曲の船を拵（こしら）え、凡（あら）ゆる凶事をも餌にする貘の思想を肚（はら）に籠めて、偉大なる現代邦楽の先人たちが抱えた葛藤やその所以（ゆえん）たる対立図式の綻（ほころ）びから、もうひとつの未来へと突き抜けようと試みた。

曲は終始単一テンポで一千一秒の持続を成す、いわば音による祝祭芸能。コツコツと船縁（ふなべり）を打つ波の律動が遠心的に増殖し、マジナイめいた異声と共に歪（ゆが）んだ囃子がじわじわ浸み出し、やがては怒濤のように荒ぶり溢（あふ）れて、愉しくも狂おしい初夢（はつゆめ）回文歌が鳴り渡る。

永（なか）き夜（よ）の　遠（とお）の眠（ねむ）りの　みな目覚（めさ）め
浪（なみ）のり舟（ふね）の　音（おと）の佳（よ）きかな

（作曲者）

委嘱新作作曲家　平野一郎　略歴

2001年より作曲活動を本格開始、京都を拠点に日本の風土や伝承に根差した創作を展開。響きや調べ、声と言葉の根源を探ね、失われた身体性・全人性を呼び覚す音楽世界を志す。日本交響楽振興財団作曲賞最上位・日本財団特別奨励賞、青山音楽賞、京都市芸術新人賞、現音富樫賞、藤堂音楽賞、京都府文化賞奨励賞等受賞。ISCM2008入選。11年モノオペラ〈邪宗門〉初演。「四季の四部作」（吉川真澄）「鬼の学校」（舘野泉）「ピアノソナタ〈光人彷徨〉」（イリーナ・メジューエワ）「鱗宮交響曲」（芦屋交響楽団）「八幡大縁起」（やわた市民音楽祭）「胡絃乱聲」（国立劇場）「とこよのはる」（森の会）等委嘱作多数。17年より出雲芸術アカデミーCIRとして「連作交響神樂」進行中。19年NHK-BS8K《落慶~奈良・興福寺》音楽制作。22年オペラ『あの町は今日もお祭り』（全5幕/国立市）初演。

©Maki Takagi

【日本音楽集団】

1964年創立。伝統的な日本の楽器である、箏・尺八・三味線・琵琶・笛、小鼓・太鼓などの打楽器、笙・篳篥などの雅楽器による和楽器オーケストラです。和楽器数十名と指揮者による大合奏は迫力満点です。
現在では、定期演奏会を中心に、全国各地での公演、教育機関での音楽鑑賞会、録音・放送・映画・演劇など様々な分野で演奏活動を行っています。
海外では、ヨーロッパ、アメリカ、ロシア、中国、東南アジア、オーストラリア、南米等、32カ国152都市で公演を実施。アイザック・スターン、ヨー・ヨー・マや、ゲヴァントハウス・オーケストラ、ニューヨークフィルとの共演を実現、海外でも高い評価を得ています。
文化庁芸術祭大賞、第2回音楽之友社賞、レミー・マタン音楽賞、モービル音楽賞など、受賞履歴多数。

【賛助会員へのお誘い】

1999年10月、特定非営利活動法人として日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動の定着と発展を目指したく、ご協力をお願い申し上げます。詳細は日本音楽集団事務局までお問い合わせください。またホームページにおいても、申し込み方法など詳しくご案内しております。

年会費：個人会員10,000円（一口以上）
法人会員30,000円（一口以上）
（年3回の定期演奏会への招待状を毎回ご送付）

特定非営利活動法人 日本音楽集団
〒151-0073東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビルB1
TEL: 03-3378-4741　FAX: 03-3376-2033
ホームページ　http://www.promusica.or.jp

【賛助会員】（口数・五十音順）

[法人会員]　日凸運送株式会社

[個人会員]　天野　麻奈美
伊藤　哲彌
伊藤　三好
伊藤　憲夫
池内　伸子
内山　小次郎
織田澤　康寿
柿崎　やよい
佐藤　玲子
新保　美恵子
高倉　尚子
友杉　毅
奈良　英子
西川　浩平
堀　保之
三宅　一徳
元永　明希
元永　美代子
森　繁美
山本　福八
他3名

個人会員計22名（2023年12月現在）

●日本音楽集団メンバー
（楽器毎五十音順）

【笛】
あかる　潤
遠藤　悠紀※
芝　有維
新保　有生
孫　瀟夢※
竹井　誠

【笙】
三浦　はな
東田　はる奈

【篳篥】
西原　祐二
三浦　元則

【尺八】
饗庭　凱山
大賀　悠司※
川俣　夜山
阪口　夕山
田野村　聡
原郷　隆
渕上 ラファエル 広志
元永　拓
米澤　浩
渡辺　淳

【三味線】
杵家　七三
長井　麻江
二代目 三山 貞正
穂積　大志
簑田　弘大
簑田　司郎
守　啓伊子
山崎　千鶴子

【琵琶】
久保田　晶子
田原　順子
藤高　りえ子

【箏】
石井　香奈
伊藤　麻衣子
岡山　亮子※
久東　寿子
熊沢　栄利子
桜井　智永
佐藤　里美
島崎　春美※
城ヶ崎　美保
久本　桂子
丸岡　映美
三宅　礼子
森　真理子
山田　明美
喜羽　美帆
渡辺　正子

【打楽器】
臼杵　美智代
尾崎　太一
島村　聖香※
多田　恵子
冨田　慎平
山内　利一
盧　慶順

【指揮】
稲田　康
苫米地　英一

【作曲】
相澤　洋正
秋岸　寛久
川崎　絵都夫
篠田　大介※
高橋　久美子
福嶋　頼秀

【アートマネジメント】
大西　愛子※

【楽器・舞台】
中島　隆

【代表】
尾崎　太一

【副代表】
米澤　浩

【事務局】
中山　美穂子

【永久名誉団員】
田村　拓男
長澤　勝俊

※印は休団中
2023年12月現在

TOKYO KINKODO

株式会社 琴光堂

〒152-0003 東京都目黒区碑文谷 2-19-15
TEL (03) 3792-8481　URL: http://kinko-do.com
FAX (03) 3792-8437　E-mail: tokyo@kinko-do.com